

審査の結果の要旨

氏名 照沼阿貴子

本論文は、生成文法理論に基づく言語獲得研究で、全称数量詞や数詞からなる数量詞句を伴う主語あるいは目的語 (QNP) を含む否定文が示す2つの意味特性に焦点をあて、子供がそのような意味特性をどのように獲得しているかを実証的に調査し、実証研究で得られた知見に対して理論的な説明を探求したものである。本論文は、人間の脳内の認知体系の一部を成すとされる言語機能の特性を捉えた普遍文法に関する仮説に関して、特に、統語と意味のインターフェイスにおける演算と表示に係わる問題の解明をめざしている。

本論文の構成は、論考の基盤となる理論的枠組みと研究課題を提示した第1章、研究課題に関して英語と日本語の獲得されるべき大人の文法の解明を行った第2章、日本語の獲得実験と発話資料分析に基づき子供の文法に関わる問題を論じた第3章、研究成果を概括し、その理論的意義を近年の言語獲得研究の中で考察した第4章、および実験に関する詳細な資料による付録からなる。本論文の研究成果は以下の通りである。

本論文が問題としたのは、i) QNP と否定辞の相対的作用域に関わる scope 解釈と、ii) 特定の scope 解釈を容認可能とする文脈の限定に関わる literal/non-literal 解釈という意味特性である。大人の文法に関しては、i) について、特定の音韻的/形態的標示を伴わない無標の否定文と音韻的標示 (英語の B アクセント) や形態的標示 (日本語の対照の「は」) を伴う有標の否定文を区別し、無標の場合には、全称数量詞の目的語 QNP は  $Q > NEG$  と  $NEG > Q$  の2つの解釈が可能となるが、有標の場合には  $NEG > Q$  の解釈のみが可能となり、一方、数詞の目的語 QNP は、有標の場合にも2つの解釈が可能となる等の記述的一般化を明らかにし、2つの scope 解釈に呼応する統語的に認可される2つの LF 表示が、統語と意味のインターフェイスで当該の scope 解釈について音韻的/形態的標示により誘発・算出される対比の含意 (CI) との整合性により選択され、ひとつの意味表示のみが残りうるという語用論的含意の算定を伴う解釈の仕組みを提示した。また、ii) について、CI とは異なる尺度の含意 (SI) の働きを考察し、i) の scope 解釈における CI 効果と SI 効果の相互作用についても検証した。子供の文法に関しては、近年の i) と ii) についての通言語的視点からの一連の獲得研究の成果を踏まえ、日本語を母語とする3～5歳児を対象として、α) 無標の否定文における scope 解釈の獲得の様相、β) scope 解釈における CI 効果の獲得の有無、γ) scope 解釈における SI 効果の獲得の有無を明らかにする実験を立案・実施し、以下のような知見を提示するとともに理論的論考を展開した。α) 全称数量詞と数詞では、解釈に相違がみられるが、数詞に対する多義的解釈は子供が数詞を指示的に解するからであり、全称数量詞の否定辞との線形順序に沿った scope 解釈への選好は文法知識の欠如ではなく言語処理の資源の未発達による困難さの反映である。β) 日本語児が CI の知識を獲得していることは発話資料分析により裏付けられ、scope 解釈では CI の計算を行なって CI 効果を理解していると推定される。γ) 子供は SI 効果がみられない字義通りの解釈も容認し、SI の計算が困難であるが、これは作業記憶内で尺度に沿って複数の含意を算出して保持・比較することが子供の未発達の処理能力に対して負荷となるからである。

本論文は、実験結果の解釈について検討を要する部分はみられるが、綿密な論考を積み重ね、scope 解釈における CI 効果を日本語の「は」を伴う否定文の獲得を研究することにより明らかにした労作であると評価した。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいものであるという結論に達した。